
魔法先生ネギま！32人目の生徒

つかちー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！32人目の生徒

【Nコード】

N1508R

【作者名】

つかちー

【あらすじ】

少女は何も知らずにこの「ネギま！」の世界に降り立った。

彼女というイレギュラーを抱え、世界の未来は変わるのだろうか？

プロローグ（前書き）

読んだら書いて見たくなる。

単純な動機ですし、素人作品ですが

楽しんでもらえれば幸いです。

プロローグ

side学園長

世界樹が光っている。

それも22年に一度の大発光に匹敵する規模で。

今はその時期では無い、そもそも次の大発光は4年後の筈。

……いったい何が起こっておるのじゃ？

『理事長！世界樹直上に大きな魔力反応があります！』

「ふむ……わかった、確認しよう」

理事長室の窓に足をかけ魔法を使って飛び立つ。

今まで確認されたことの無い未知の現象となれば警戒しておかねばならない。

「あれのようじゃの」

世界樹の真上。

そこには煌々と輝く世界樹の魔力が一カ所に集中している。

……敵意や悪意は感じられんが、どうしたものかのお。

そのとき魔力は一層強く輝いた。

まるで、鼓動するように。

まずい、何かが起こる………！

「魔力障壁最大展開！」

体を魔法陣が幾重にも取り囲む。

そして魔力は今まで以上の輝きを放ち、視界を奪った。

……だけだった。

魔力は一際強く光って、その後拡散し始めている。

あれはなんじゃ……？

視界を取り戻すと、未だ残る魔力の輝きの中心に人影を見つけた。

世界樹の魔力の光に守られるように宙に浮くのは、少女。

11～12歳くらいの小柄な体に長く黒い髪。

光の反射だろうか、仄かに光っているようにすら見える。

関係……無い訳が無いじゃろうな

小さな体を抱きかかえると、理事長室へと引き返した。

少女をソファに寝かせて、他の魔法先生に連絡を取る。

「関係しと思う少女を保護したわい。気を失っておるようじゃがの」

『わかりました、世界樹の魔力もあらかた拡散してしまった様です』

「うむ、ご苦労。悪いがしばらく様子を見ておってくれ」

『はい。理事長も無理をなさらぬ様に』

通信も切れ部屋には静寂が訪れた。

大きな窓からは世界樹の光の名残が差し込み、どこか幻想的でした。
あった。

「……うん」

寝かせていた少女が小さな声を上げた。

「お目覚めかのお？」

起きあがった少女は周りをキョロキョロと見回し、その後儂のことを
を見つめる。

その瞳も髪のように黒かったが、周りの光を取り込んだかのように
輝いていた。

「あなたはだれ……？」

プロローグ（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

まだ、プロローグでしかありませんが
気長にやって行きたいと思っています。

また、タグ（？）はネタバレしないように
最低限にしておこうと思っています。

なおRー15表記ではありますが
あまり深い意味はありません。

念のためと言ったところです。
（どこまでセーフか分かりませんし）

「ルームメイト」(前書き)

中途半端すぎるだろうか？

「ルームメイト」

side 学園長

「あなたはだれ……？」

少女は首を傾げて聞く。

まだ少し頭が働いていないようじゃな。

「儂はこの麻帆良学園の学園長をしておる。近衛 近右衛門じゃ。」

「ふうん……それで此処はどこ？」

儂はは割と偉いんじゃが全く動じた様子は無い。

寝ぼけているのか、そもそも儂のことを知らないのか……

「ここはその学園長室じゃよ。」

「……こっちからも質問していいかの？」

「……答えられる事ならいいよ」

「ふむ、じゃあまずお名前を教えてくださいませんか？」

「名前……私は……？」

すると少女はブツブツと呟きながら考え込んだ。

「わたし？……わたくし？……うーん……ぼく？」

「どうかしたかの？」

「あ、ううん、違うの。」

ボク……うん、ボクの名前はステラ。

ステラ・トワイライト……だと思う。」

「それはどういう意味かの？」

「えっとね……それ以外何も思い出せないんだ。」

「つまりは、記憶喪失ということじゃの？」

「うん、たぶんそう。あ、そう思います。」

頭が動き出したのか多少敬語っぽくなったの。

その顔には不安も見えて取れる。

「どうしてここにいるのかもわかんないけど

ここに来る前どこにいたのかもわかんない……わかりません」

ふむ……嘘をついている様子は無いし

素直で真面目そうない子の様じゃが……

とりあえず今は時間が必要かの……

「そおじゃの、まずは落ち着くといい。

これからのことはゆっくり考えればいいからの」

「ハイ……」

……

sideステラ

……ジリリリリリr……がちゃん。

朝、まだうつすらと空の色が変わりはじめた頃。

まだまだ寒い1月下旬の空気の中どうにか布団の誘惑から抜け出す。

懐かしい夢を見たな……

とは言ったもののまだ2年位しか経っていないけれど

ボクからしてみれば記憶のもっとも古い部分。

最初に見た理事長は妖怪かと思ったけど……

それでも大切といえる思い出だ。

今ならはっきりとそう言える。

けど、そんな事よりも今は……

「アスナー早く起きないと置いていくよー」

「ルームメイト」(後書き)

あらかじめ断っておきます。

この話はオリキャラが出てきますが
転生でも無ければチートでもありません。

あくまでも原作通りに行く予定です。

オリキャラを原作にねじ込みたい

そんな超趣味小説だと思ってください

化○語が100%趣味で書かれているなら
この話は200%趣味で書かれています。
趣味を越えて悪趣味かもしれません。

原作コミックを友達に貸しっぱなしなので
それを回収してから続編に入りたいと思っています。

「新任教師」 (前書き)

こんなペースでいくと
話が進まないなあ (最初だから仕方ないか)

「新任教師」

「やばいやばいー」

今日は早く出なきゃいけなかったのに！」

「それはアスナが二度寝してなかなか起きなかったからだよ」

いつものように慌ただしい登校風景。

大切な日常。

「うっさい！」

でもさ、何で学園長の孫娘のこのかが

新任教師のお迎えまでやんなきゃなんないのよ」

髪型をツインテールで鈴の髪飾りをしているアスナ。

元気なのはいいけど今日は不機嫌な様子。

もつと寝たいんだろうね。

「スマンスマン」

でも、今日は運命の出会いありって占いかいてあるえ。

しかも、好きな人の名前を10回言って「ワン」と泣くと効果ありやて」

「うそっ!？」

高畑先生！高畑先生！高畑先生！高畑先生！（以下略）！ワンッ！」

「あははは、高畑先生のためなら何でもするなあ。

ホントにやるとは……」

アスナをからかっているのはこのか。

髪型はボクと同じ腰まである黒いストレート。

京都出身でまさに大和撫子。

ボクとは何かが違う（気がする）

「その根性だけは褒めてあげたいね」

「あんたら……殺すわよ」

「それにしてもアスナ足速いよねー」

私たちはコレやのに」

「悪かったわね体力バカで」

アスナは普通に走っているが、それについていくために

このかは普通のローラーブレード。

ボクは超・鈴音特製のローラーブレードを使っている。

ふわっ……

「ん？」

結構なスピードで走るボクたちに並んでいるのは

10歳ぐらいの……外国の子かな？

「あの一……あなた失恋の相が出ていますよ」

「え……な……なんだとこのガキヤー！」

「うわああ！？」

なんだか占いの話が出ていたようなのでつい……」

「どどど、こういう事よテキトーいうと承知しないわよ！」

ワナワナと取り乱すアスナ。

感情的なところは長所であり短所でもあるかな？

「なあなあ、相手は子供やろー？」

この子小等部の子と違うん？かーいーなあ」

「あたしはねガキが大ツツキライなのよ！」

取・り・消・しなさいよ~~~~~」

「あいや…あわわ…」

頭掴んで持ち上げるだなんて

アスナは相変わらずの馬鹿力だね。

「坊や、こんな所に何しに来たん？

ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子校エリア。

初等部は前の駅やよ？」

「そう！」

つまり子供は入ってきちゃいけないの

わかった？」

「は、放してくださいーっ」

「落ち着きなよアスナ、用事あるんだよ？」

「そうね。じゃあねボク！！」

「いや、あの、ボクは」

「いやーいいんだよ、アスナ君！」

校舎二階の窓からの声。

あれは担任の高畑先生だね。

「お久しぶりでーす！！ネギ君！」

「えっ？」 「あ！」

「高畑先生！？」

「「おはようございます」」

「久しぶり、タカミチーッ！」

ボクたち三人の挨拶と手を振る少年の元気な声。

そして驚くアスナ。

ホント感情豊かだね。高畑先生の事になると特に。

「!?!?!?!?!。し、知り合い……!?!」

「麻帆良学園へようこそ。いいところでしょう? 『ネギ先生』」

「え……せ、先生?」

「あ、ハイ、そうです

(コホン) この度、この学校で英語の教師をやることになりました。

ネギ・スプリングフィールドです……」

「え、ええ……っ!?!」

「新任教師」 （後書き）

今後はうまく話を削りながら。

しかし、原作に沿って続ける予定です。

それでも、不確定要素が入っているので

少しずつ原作からずれていくと思います。

「アスナ驚愕」(前書き)

試行錯誤中

「アスナ驚愕」

「ちょ、ちょっと待ってよ。先生ってどーいうこと!？」

あんたみたいなガキンチョがー!」

驚きを隠せないアスナ。

あ、高畑先生が降りてきた。

「いや、彼は頭がいいんだ。安心したまえ」

「先生…そんなこと言われても……」

「あと、今日から僕に代わって君たちA組の担任になってくれるそうだ」

「そ、そんなあ! アタシこの子イヤです!

さっきだってイキナリ失恋……いや、失礼な言葉を私に……」

「いや、でも本当なんですよ」

「本当言うなー!」

「だいたいアタシはガキがキライなのよ!

「アスナ驚愕」(後書き)

前話で変な所で切ってしまい、かなり短め。

後先考えて、計画的に書きたいところ。

改善点などアドバイスをもらえると嬉しいです。

「学園長権限？」（前書き）

早くバトルに入りたい……

3巻位まで飛びたい……

……しかしこの程度で挫けたくは無いです。

「学園長権限？」

学園長室

「学園長先生！！」

一体どーゆーことなんですか！？？」

「まあまあ、アスナちゃんや」

今、学園長室には5人がいた。

ボク、アスナ、このか、学園長、ネギ……先生。

始業時間過ぎてるんだけどなあ。

「なるほど、修行のために日本で学校の先生を……」

そりゃまた大変な課題をもうたのー」

「は、はい。よろしくお願いします」

「しかし、まずは教育実習とゆーことになるかのう。

今日から3月までじゃ……」

「ちょっと待ってくださいってば！」

だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！

しかもうちの担任だなんて……」

学園長の割と普通な対応にアスナが待ったをかけた。

アスナの言ってることももっただけど……

ボク達のクラス的には今更な気もするんだよねえ。

「ネギ君、この修行はおそらく大変じゃぞ

ダメだったら故郷に帰らねばならん。

二度とチャンスはないが、その覚悟はあるのじゃな？」

「は、はいっ、やります。やらせてくださいっ！」

いよいよこの学園は何でも有りだよね。

そういうところもボクは嫌いじゃないよ。

そもそも、ボクには記憶が無い。

だから、普通とか普通じゃないって言うのはあんまり分からない。

「…うむ、わかった！」

では今日から早速やらしてもらおうかの。

指導教員のしずな先生を紹介しよう。しずな君」

「はい。（ボフツ…）あら、ごめんなさい」

「わからないことがあったら彼女に聞くといい」

「よろしくね」

「そうそう、もう一つ。

このか、ステラ、アスナちゃん。

しばらくネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの。

まだ住むとこ決まっとらんじゃよ」

「げ」「え…」「ええよ」「うん、わかった」

順にアスナ、ネギ先生、このか、ボクの反応。

情けは人のためならず。

正しい意味は、他人に優しくするとそれは自分に返ってくる。

たぶんそんな意味だったよね。

あ、でも今の部屋に4人は狭いかも。

「もうっ！ そんな何から何まで！ 学園長ーーーーっ！！」

「学園長権限？」（後書き）

まだ1話の半分も行っていないだと……

さすがに密度が濃いです。

ホント飛ばしたくなる。

けど、学園異能物は、日常があって異能生きる、異能があって日常が生きる物だと思っています。

故に手は抜けない、抜きたくない。

それにしても学園長権限っえー。

「自己紹介」(前書き)

後書きはメタコーナーにしてみる。

建前は「主人公のキャラ」をより深く知ってもらうため？

「自己紹介」

2年教室前の廊下

険悪な雰囲気。

アスナは不機嫌。

ネギ先生は……緊張もあるのかな？

「あの……」

「あんたなんかと一緒に暮らすなんてお断りよ!!」

じゃあ私先きますから、先生!!」

アスナはそう言って先生を置いていく。

もちろんボクとこのかも続いた。

「ひどいなー」

「失恋の八つ当たり？」

「違う！」

顔が怖いよ、アスナ。

2－A教室

「おはよう、エヴァちゃん」

毎朝恒例となっている挨拶。

隣の席になったのも何かの縁と始めたが返事を貰った事は無い。

そうなると思地でも仲良くなりたいたいと思ってしまった。

だから今日も……

「おはよう」

「……なんかいいことでもあったのかな？」

「……まあ、な」

いきなりは無しだよ、こっちが困っちゃう。

でも、一歩前進……かな？

——コンコン

来たな、ネギ先生……！

「その、ようだな」

フフツと笑うエヴァちゃん。

ん、声に出しちゃったかな？

「失礼しま……」

おっと、そんなことより美空×双子の新作トラップは見逃せない。

カチコチになった先生の頭上に黒板消しが落ちる。

……ふわりっ……ボフツ

ん？

「ゲホゲホ。いやー、あはは、なるほど、ゲホ。

ひっかかっちゃったなあ、ゴホゴホ」

ガッ！バインツ「へぶっ！？」ゴッ！「あぼ！」ガボンツ

パスツ「あ！」パスツ「ああ！」パスツ「あああ！！」ゴガガッ「ぎゃふんっ！」ドンツ！

「「「あははははははっ」「」」

本来、**罠**でしか無い黒板消しトラップを含め

ロープ、バケツ（水入り）矢×3（吸盤式）

計4つの罠全てにかかり、教室は笑いに包まれた。

そんな中の小さな違和感。

見事なトラップ・コンボだったはずだ。

……気のせいかな？

「えっ……?」「あ……あれ……?」

「えーっ子供!?!」「君、大丈夫!?!」

「ゴメン、てっきり新任の先生かと思って……」

「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ。」

さ、自己紹介してもらおうかしら、ネギ君」

「は、はい」

一変、教室は静まりかえる。

完璧と言って過言ではない女性、しずな先生はかなり尊敬されているからだ。

「ええと、あ……あの……ボク……ボク……」

今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました

ネギ・スプリングフィールドです。

3学期の間だけですけど、よろしくお願いします」

「自己紹介」(後書き)

ステラ(以後ス)

ス「と言うわけで始めましたメタコーナー」

作者(別名つかちー。以後作)

作「わー」(ぱちぱち)

ス「で、何なのこのコーナー？」

作「思いつきと趣味」

ス「……怒ってもいい？」

作「まあまあ、ほら自己紹介」

ス「あ、えっと。麻帆良学園女子中等部2年A組20番

ステラ・トワイライトです。

よろしくお願いし……って誰に？」

作「気にしない、……ノリつつこみもできるんだね」

ス「2－Aに居たらね……仕方ないよ」

「指導教員の實力」(前書き)

若干とばして……

それでも1話はなかなか終わらない

「指導教員の実力」

キヤーキヤーと黄色い歓声が響く。

教室全体が震えているかのようだ。

まあ、騒がしいのはいつものことだけれど。

「クククッ。ホント楽しくなりそうだ」

……エヴァちゃん、なにか知ってたのかな？

寧ろ知り合い？

「ねえ、エヴァちゃん。先生の知り合い？」

「いや、知らないな……あいつは。」

それと馴れ馴れしく呼ぶな……」

……あいつは、か。

やっぱり何かを知っているんだね。

聞いても教えてはくれないだろうけど。

「キッチリ説明しなさいよー！」

おや、アスナの様子が……

暴力はいけないよー？

「いいかげんにしなさい！！」

先生がお困りになっているでしょう」

委員長……雪広あやかがクラスをまとめる。

初めて会った時から委員長、今までずっと委員長、ボクと会う前から委員長。

その委員長の名は伊達じゃないね。

「アスナさんも、その手を放したらどう？

もっとも、あなたみたいな凶暴なおサルさんには

そのポーズがお似合いでしょうけど」

「何ですって？」

「先生、どうぞH Rをお続けになってください」

「委員長、何いい子ぶってんのよ、アンタ！」

「あら……いい子なんだから

いい子に見えてしまうのは当然でしょ」

「何がいい子よ！このシヨタコン」

「なっ！？言いがかりはおやめなさい！

あんたなんかー！ー！！」

ギャーギャーと始まるケンカ。

まあ、いつものことだしねえ。

周りのみんなだつてすでにギャラリーモード。

いつもケンカばかりしてるけど、二人にとって仲のいい証拠。

……詳しい事情をボクは知らないけれど。

（パンパンッ）

「はいはい、時間もおしてるし授業しますよー。」

ネギ先生、お願いします」

「は、はい」

一瞬で騒動を収めて見せた。

やっぱり、しずな先生はスゴいよなー

「指導教員の實力」（後書き）

ス「今回のメタコーナ」（名称募集）」

作「ハーイ、今回のゲストはー」

ス「え、いるんですか？」

作「いません。（漫画内での）1話が終わるまでは出しません」

ス「……何で期待させたんですか？」

作「いや、出そうかな？と思ったけど……」

ス「けど？」

作「……やっぱり内緒。出てきたときのお楽しみ」

ス「それまで無事に続けばいいけど……作者の根気が」

作「いや、1話くらいちゃんと……じゃない！

ねえ！それはボケだよね！？ボケもできるんだよね！？

本気で言っていないよねー！！？」

ス「2－Aに居たらね……仕方ないよ」

出張！ISへインフィニット・ストラトス◇前編（前書き）

作「今回は本編のネタバレを含みません」

ス「今回はって何ですか」

作「今後はあるかもしれないだろ？」

ス「まだやる気ですか？こんな事」

作「どうだろうね？」

出張！IS ヘインフィニット・ストラトス＜前編

side 束

そこは奇妙な部屋であつた。

様々な機械で溢れかえっている上、あちこちから警告音が響いている。

理由はさっき起きた爆発のせいだ。

おかげで視界もままならない。

「けほけほっ。びっくりしたー」

爆発は起きたが被害は少ない。

それは此処が篠ノ之束の秘密ラボだからだ。

つまり、世界の常識は通じない次元とすら言える。

視界はすぐに晴れた。

「おぉー！まだ試作のつもりだったんだけどなー！」

さすがは完璧にして十全な私！イエーイ！

っと、一人ではしゃいでる場合じゃない。

「ようこそ、我が世界へ。」

爆発があつた場所には一人の少女がいた。

少女は何が起こったのかわからないと言った様子で訪ねた。

「『此処は何処？』いい質問だね。あ、一応聞いておくけど記憶喪失じゃないよね？」

少女は少し考え、頷く。

「よしよし、大丈夫だね。じゃあ疑問に答えよう。

此処はあなたがいた世界では無い、つまり異世界」

少女は告げられた事実をうまく飲み込めず、キョトンとした顔だ。

「私があなただを呼んだのです！

私の名前は篠ノ之束。この世界でもっとも神様に近い人間だー！

つまり神様がいなければ私が一番！」

少女は話しに何とか食らい付き、希望を告げた。

「元の世界に帰る方法？うーん、今すぐには無理だねー

まあ、その代わりにいい物あげちゃう。

これさえあれば、この世界では困らないから大丈夫！

それに、私のプライドに賭けて元の世界に戻して見せるよ！

ちよーと、時間がかかるかもしれないけどね。」

正直、完璧でも十全でも無かった。

完全に予想外の出来事でしかない。

けれど、それはとても面白い事だと、天才故にそう思った。

出張！ISへインフィニット・ストラトス◇前編（後書き）

ス「って、何ですかこれはー!!」

作「何ってIS……」

ス「出張って台詞も無いじゃ無いですかー！」

作「まだ前編だって……」

出張！ISへインフィニット・ストラトス＜中編（前書き）

ス「中編？」

作「ごめんなさい」

ス「いや、怒ってないって」

作「うーん。前編後編の予定だったんだけどな？」

ス「何がしたいんですか？」

作「メカメカしいバトルがしたいだけ何だけど……」

ス「それもどうなんですか？」

作「あ、今回ネタバレは……」

ス「あるんですか？」

作「……いや、無い。あれはフラグだ」

ス「どういう意味ですかそれは」

出張！IS ヘインフィニット・ストラトス＜中編＞

Side 一夏

『織斑。準備はいいか？』

「はい」

『では、始めるぞ』

ある夏の日、昨日に引き続き第二形態に移行した白式のデータ収集。

と、言う名目で行われる模擬戦闘。

しかし、その本当の目的は違う。と、千冬姉は言った。

これはただの我が儘だ、と。

IS 開発者である篠ノ之束の我が儘だと。

それは、スペシャル束特製な機体のテスト。

少なくとも紅椿と同等、もしくはそれ以上の機体。

「じゃあ、行きます」

そう言って離陸し、開け放たれたゲートをくぐる。

相手の姿はすでにハイパーセンサーによって捉えられている。

色のベースの黒に白いラインが印象的な白黒カラー^{モノクロ}。

ラウラのシュバルツエア・レーゲンに比べかなりシンプルだ。

本来ならコア・ネットワークによって相手のIS情報もある程度送られてくる筈だが……

——操縦者ステラ・トワイライト。ISネーム『スター・ライト』。
戦闘タイプ不明。

つまり見た目からある程度推測しなければならないのだが、その形状は今まで見たことの無いタイプだ。

ISには大体、大型の推進器^{スラスター}が付いているのが一般的だが、まずそれが無い。

そしてアーマーも少ない。見たところ武装は右手の黒い直剣のみ。

『それでは。模擬戦闘始め!』

アリーナに千冬姉の声と鐘の音が響く。

刹那、相手が動く。一直線にこちらに向かって来る。

間違いない、相手は近接格闘型だ。

しかし、アーマーが少ないのは何故だ？

スラスタ
推進器も無いから高速機動型でも無いはず……

そんな疑問があつたから回避行動をとった。

雪羅の荷電粒子砲で牽制しつつ様子を見る。

普段ならこんな事は考えなかっただろう。

白式の弱点は燃費の悪さによる持久力の無さなのだから。

出張！ISへインフィニット・ストラトス＜中編（後書き）

ス「……………」

作「あれ、怒らないの？」

ス「怒って欲しいんですか？」

どうせ、まだ中編だからって言うでしょう？」

作「まあ、そうなんだけど」

ス「だったら怒るだけ無駄です」

出張！ISへインフィニット・ストラトス◇後編（前書き）

作「今回もネタバレは無いよー」

ス「投げやりになってない？」

作「まあ、いいんだって」

ス「はい？」

作「ではまた、のちほどー」

出張！IS ヘインフィニット・ストラトス＜後編＞

回避した。

相手が武器を持つ右側から牽制をしかけるためだ。

相手を右手に見ながら左にゆく。

しかし、相手の動きはこちらの想像を上回った。

加速したのだ。

「なにっ！」

大型の推進器スラスターは確かに無い、が。

推進器が全く無いわけではない。

小型の推進器から一瞬だけ輝く。

つまり加速。

「なるほど、そう言うことか！」

推進器の小型化、それはつまり――

大型の推進器と違ってチャージ時間が短い。

しかし小型な分だけ、推進力は落ちる。

ゆえの軽装。重量は最小限に落としてある。

「このっ！」

一気に間合いを詰めてきた相手を雪片式型で迎撃する。

鋭い斬撃がこちらを襲う。

「ふっ！」

速いっ!!

ISの武装としてはかなり心許ない長さしか持たない直剣。

これもまた、速度を生かすための武器。

速度に特化した機体。

機能特化型と言うことはつまり、長所短所がハッキリしているってこと。

相手のペースに乗せられたらマズいって、シャルが言っていた。

「うりゃ!!」

大振りな横切りで間合いを作る。

「これなら!」

雪羅の射撃モード、大出力荷電粒子砲。カノン

当たれば一撃で決められる!

放たれたエネルギーが相手を襲う。

あろう事か相手はその粒子砲を切り払った。

まさか、としか言いようが無い。

自分なら零落白夜を使って同じようなことができるだろう。

雪羅によるシールドもあるし、燃費も良くないからする気も起きな

いが。

だが、相手にはする必要も無い。

その加速力スPEEDをもつてすれば、回避はできた。

必殺の一撃となるリスクは回避できる物の筈だった。

勿論、その回避の隙について零落白夜をたたき込むつもりでいたのだ。

『本気でいくよ』

ISから聞こえた相手の声。

同時に相手のISの背から光の翼が現れた。

そして左手には新たな武装。

白いそれは、エネルギーの刃を持っている。

そして、今までとは比べ物にならない速度でこちらへ突っ込んで来た。

「なっ!?!」

煌々と輝く光の翼に同じく白いエネルギーブレード。

思わず「燃費は！羨ましい！」と、叫びそうになったが冷静さを取り戻す。

エネルギー兵器なら白式の敵じゃない！

雪羅をシールドモードに移行して迎え撃つ。

そのとき相手が笑った気がした。

しかし、そのことを疑問に思う前に理由はわかった。

ブレードのエネルギーは四。

シールドを狙った右の黒い直剣での斬撃。

まるで零落白夜での攻撃のようにエネルギーが削れる。

このままでは負ける。

そう思ったときにはもう白式の最大攻撃、零落白夜を発動させていた。

たとえば分の悪い賭けでも最後まで勝利を諦めない。

「うおおおっ！！」

上段からの全力の斬撃は相手を両断したように見えた。

ハイパーセンサーですら一瞬見失った。

切ったのはその圧倒的な速度とエネルギーによる残像。

相手は真後ろにいる。

左手には先ほどよりもエネルギーを増した白いブレード。

しかし、斬撃は来なかった。

アリーナに決着を告げるブザーが鳴り響く。

『試合終了。勝者――ステラ・トワイライト』

白式のエネルギーは既に尽きていた。

出張！ISへインフィニット・ストラトス◇後編（後書き）

ス「……なにか言うことは？」

作「実はこの後終編に続きます」

ス「終編って何ですか？」

作「ここまでやらないと終われないの

後、短い代わりに後書きは長いです」

ス「本末転倒過ぎだよね」

出張！ISへインフィニット・ストラトス◇終編（前書き）

作「今回は後書きが本編です」
ス「何を言ってるんだか……」

出張！ISヘインフィニット・ストラトス＜終編

side ステラ

.....

時刻はセットした目覚ましの鳴る10分前。

日も出てなければ鶏も鳴かない、そんな時間。

慣れてるから苦になってる訳じゃないけど

ここまでスッキリとした寝起きも珍しい。

昨日寝たのが早かったからだろう。

「まあ、いいか。

アスナー。たまには速く起きてー。

バイトの時間だよー」

それにしても……なんか変な夢を見たような……

なんだっけ？

この前このかが夢占いがどうとか言ってたし

聞いてみようかな？

でも……

「どんな夢だったっけ？」

結局、詳しい内容は一切思い出せなかった。

出張！IS ヘインフィニット・ストラトス＜終編（後書き）＞

ス「怒らせろっ！」

作「スペースが勿体ないので後のして」

ス「で、夢落ち？」

作「うん、夢落ち。」

でも最初は『予知夢かもよ？』って終わるつもりだったんだけど」

ス「けど？」

作「別アイデアが出たから別口で書こうかと思ってる」

ス「結局ただの夢ってことじゃん!？」

作「まあ、まあ

と言うわけでこれで終わりー」

ス「やたらと謎が残って無い？」

作「うーん、ISの設定とか？」

ス「そうそう、なにあのチート」

作「要望があれば詳しく書いてもいいけどさ」

ス「質問とかも？」

作「あれば、ね

まだコメントもらった事も無いし

答えられることなら答えるよ」

すいませんでした。

今回、誠に勝手ながらこの小説は凍結することにしました。

無責任な事を言っているのは重々承知しておりますが、いくつかの理由もあり早めの対応をと言うことです。

理由は主に4つ

1、見よう見まねで書き出したので改行ばかりのよくわからない形になったこと。

2、まだ、早い段階であること。（まだ取り返しが付くと思いましたが。）

3、番外編のせいで本格的にISを書きたくなってしまったこと。

4、30以上のキャラ？そんな無茶な……（書き始めて気づいた）

と、言った所です。

「それじゃあ、ボクはどうなるんですか？」

怒ったステラさんも出てきましたが、しばらくは見送りとなります。腕を磨いてから再チャレンジ（言い訳ゴメンナサイ）

本当に申し訳ないと思いながらも次はISです。

ISはアニメになる前から読んでいて、アニメ化の話聞いたとき思わず踊りました。興奮したせいです。（あのころは若かった…!?）

アニメ化して一気にメジャーになったりしたあたりは複雑な心境だったり。

あれだけキャラも立っていれば多分話にしやすいと思っています。（自分で考える前にキャラが動きます…多分）
ただしご都合過ぎるハーレム展開だけは阻止してみせる…!!

さて、この度の突然の終了（と言うか早すぎる挫折）に関して幾重にも謝罪申し上げます。

しかし、これが自分なりの決断です。

この決断が今後の意味を持つ事を願います。

すいませんでした。(後書き)

作「敬語が変わったりしませんかねえ？」

ス「……………(ぶすう)」

作「あ、一応はじめとして、1話終了までは書きます」

ス「……あんまりだ……」

作「いつになるかわかりませんが……」

ス「あんまりだー!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1508r/>

魔法先生ネギま！32人目の生徒

2011年4月4日16時35分発行